第３部　地域活性化に向けて

第１章　地域活性化に向けた現状と課題

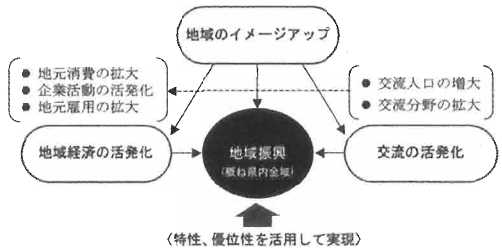
１　広域的地域活性化策について

(1)　広域的地域活性化の考え方と課題

①　広域的地域活性化の考え方

第１部、２部で示したとおり、「茨城空港」は、首都圏で成田・羽田に次ぐ第３の空港としてまた北関東の玄関口として、年間100万人もの利用客が見込める可能性に満ちた「新たな地域資源」であり、まず第１に県内を中心としながらも、連携し視野も広げた形での地域活性化推進を図るべきであると考える。平成15年６月に策定された「百里飛行場エアフロント基本構想」においての広域的地域振興方策の基本的な考え方として以下の様に述べられている。

〈基本的な考え方〉
1．既存の観光資源や工業集積、地域開発計画等を活用したプランとする。
2．道路交通網の整備を念頭に、県内の都市等との広域的なネットワーク化を図る。
3．ハード整備中心でなく、ソフト事業展開を中心に考える。
4．国内就航先との交流の活発化に向けた地域の受け皿を整える。

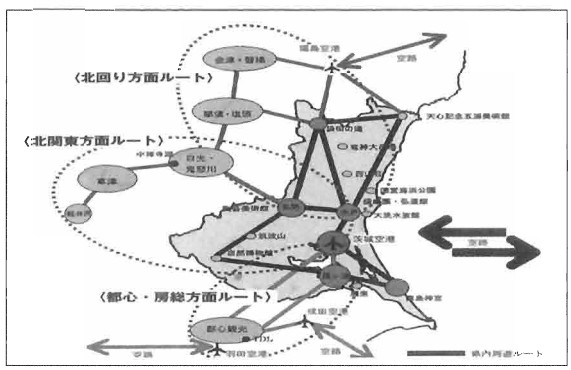


(出典)「エアフロント構想」より抜粋

この基本的な考え方に加えて、交流人口増加に伴う着地型（インバウンド）の外国人を含めた利用客に対し地域の魅力を創り出して、いかに広域的視点で活性化につなげていくのかが、課題と言える。

②　広域観光における地域活性化策と課題

広域観光に着目した観光ルートとしては、前述のエアフロント構想においては(イ)北回り方面ルート　(ロ)北関東方面ルート　(ハ)都心観光ルートの３ルートで２泊３日程度の広域観光ルートが示されている。



茨城空港を活用した広域観光ルート

この中で、特に都心観光ルートを除く２ルートについては、まず第１に(イ)県内の地域資源を回るルートを必ず加え、(ロ)そこで滞留時間を少しでも長くとれる様工夫し、(ハ)「食」と特産品の「お土産品」の購入を促進させる様な戦略的取り組みが必要であろう。

〔地域活性化具体策〕

・提案型広域観光ルート及びツアー旅行の展開

文化、温泉、体験等のテーマを設定し、インバウンド利用客にアピールする

（例）文化ツアー（観賞と体験の旅）偕楽園～近代美術館～大洗～天心美術館～袋田の滝～陶芸美術館～空港

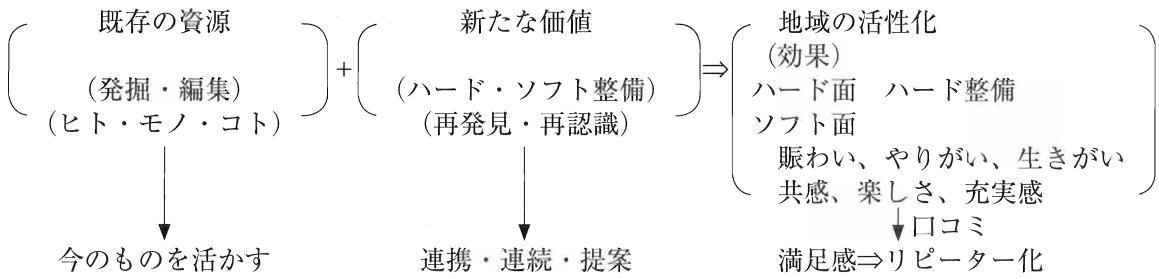
「食」については、必ず県内産の農林水産品を50％以上食する様な工夫をしアピールする。

・参加・体験型広域観光ルート及びツアー旅行の展開

イベントに参加したり、ハイキング・サイクリングなどを楽しむアクティブなコース設定（ゆっくりとした楽しみを味わってもらう企画を入れる）

・交流を中心とした季節毎の「常陸の国」ツアー

県内のイベントや地域おこしの行事や農業体験などに参加して、茨城ならではの人・自然・食を満喫する企画ツアーいくつかの例を並べてみたが、要点は、以下の流れで活性化を具体化させる。



この県内基本パターンを準備しておきながら、次に近隣の代表的な観光資源（日光、那須、草津、会津など）を組み合わせれば良いのではないだろうか。観光立県＝いばらきを目指す上でも、積極的に「提案型企画」を推進させる事を強く提言したい。

〔課題〕

・空港利用促進プログラムの今後開港に向けて一歩づつ推進させる実行部隊づくりとその為のサポート支援並びにチェック機能

→多くのプロジェクトの場合、骨子は素晴しいが、実行が伴わないケースが多い。PDCAサイクルをしっかりと回す事が課題である。

・連携力強化を図る

→広域的な関係機関の連携とリーダーシップ発揮は言うに及ばず、県民１人１人に対しても「新たな地域資源」の有効活用を考える仕掛けづくりを継続的に実施する。（例）ご近所百景の募集

・拠点のPRとハード整備の推進

→19年度より施策が開始し、その資源を認定した「地域資源活用プログラム」に掲げられた地域資源は拠点として非常に有力な資源である。それらも含めた地域の魅力を創出させる地域資源を発掘、編集して市場に丁寧にアピールする事が重要と考えられる。その場合、地元旅行業者各社やマスコミなど関連する機関が連携すると、より効果が出やすい。また、ハード整備としては、公衆トイレと案内所は必要となる。そこに、ソフト面を整備し加えていく方向性である。さらに案内表示についてはアジア圏の方々の来県を意識して、英語だけでなく、中国語、韓国語等のサイン・マップ等も導入し、関係諸国へアピールする事も重要である。

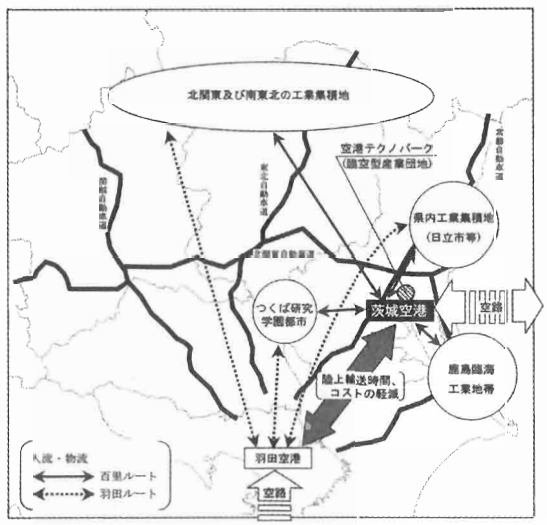
・地域の「おもてなし」力を高める

近年、少し変化が見えるものの、いばらき県人のPR力の不足は完全には解消されていない。他人を「おもてなし」をする事が自分も活きる事である～その事を空港開港を契機に県民が意識できる仕掛けづくりが課題である。それには１人１人が出来る事を考えてもらう事が基本であり、具体策としては「特産品づくり」、「イベントの開催」等、出来る事を積み上げ編集する力・機関が課題となる。

③　物流変化における地域活性化策と課題

茨城県は、首都圏に位置する地理的優位性に加えて、高速道路整備（常磐道、北関東道、圏央道、東関東道）が厳しい財源の中でも着々と進んでおり、また、ひたちなか港等の海港整備も実施され、東北と東京都心との中間を結ぶ物流拠点地区として戦略的整備を進めている。それに合わせ、近年県内各地で積極的な企業誘致が行なわれ、工業地帯整備も着実に進んでいる。

「エアフロンティア構想」では、今回の茨城空港整備により、更に北関東及び南東北の工業集積の物流変化まで着目し、地域振興を示している。



北関東の工業集積や物流の変化に着目した地域振興

今回、空港の開港時には、中型機までの、離発着である為に、空港を利用した大きな製品輸送は当初見込めないかもしれない。しかしながら、隣接の「空港テクノパーク」の整備や空港周辺を含め更なる道路網の整備が進む中で、中・長期的には物流コスト削減やCO_2排出抑制の環境問題、更なる県内の企業誘致の進展等を考え合わせれば、首都圏で羽田空港を補完する形での、空港輸送進展の可能性に満ちている。

〔地域活性化具体策〕

・空港テクノパークの整備と企業誘致

前述の空港開港における、経済波及効果に示したとおり、企業進出により、雇用促進と関連の地場産業育成が図られる。

・総合物流効率化推進に向けた物流基地整備

交通インフラの整備により国の推進する新たな物流展開のモデル的整備が可能となる。

〔課題〕

・企業誘致に向けた魅力創出とそのPR等の積極的展開

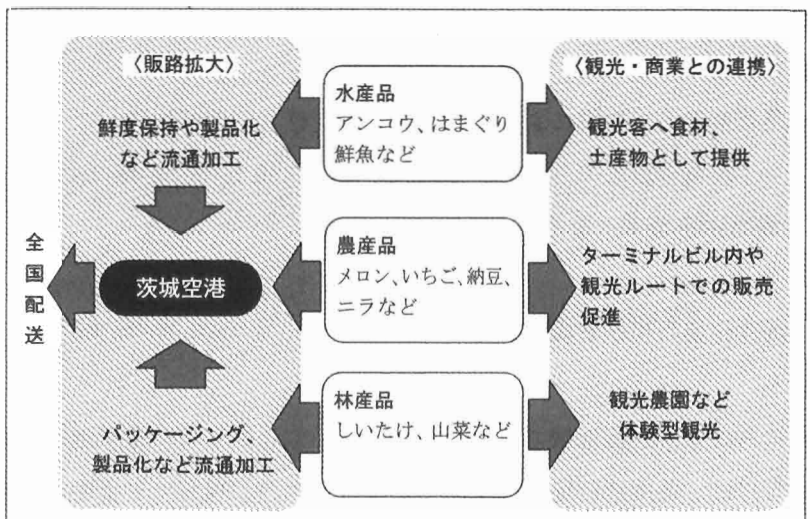
・つくば研究学園都市との連携による「茨城らしい事業」展開

・高速道路整備を含めた早期の道路整備

→新たな物流（効率化と環境保全）に対する優位性が充実発揮される展開が必要である。

④農林水産業における地域活性化策と課題

全国でも有数の生産高を誇る農産物をはじめ、茨城県は自然に恵まれ「海や山の幸」が豊富である。県は、農産物の推奨の一貫として「うまいもんどころ」等の施策を展開し、積極的に販売促進をサポートしている。「エアフロント構想」においても、空港を活用した新たな地域振興を示している。



農林水産業に着目した地域振興

茨城県の魅力を効果的かつ早期に引き出す為の方策として、その有数な「産地力」を充分に活かす。活性化策展開は当然とも言える。

食の安心 安全	+	地産地消 ブランド化	=	楽しさ 新たな交流 意欲向上	⇦	茨城 らしさ
（茨城産）		（顔が見える）		（地域活性化）		（創出）

〔地域活性化具体策〕

・「うまいもんどころ」商品の更なる活用とPR促進

「地域資源活用プログラム」と連動する形で、更なる高付加価値のついた商品開発を図ったり、そもそも「うまいもんどころ」ブランドの権威付けを消費者（旅行者）に明確にすべきである。空港開港を契機に、より積極的なPR展開を重ねる。（例）季節毎にテーマを決めて空港のロビーと産地の２元でのイベント実施

・「県産農林水産物等指定店」の推進

県産物を「食」し、その良さを味わってもらう事が、茨城の魅力を引き出す事につながる。

→“茨城に来て良かった！”を演出させる。その為の「良い食材」の提供と「茨城らしさを演出する料理」と「食する店・創る料理人」の３つを一体的に推進させ、それをPRする。

・地元食材を活用した料理コンクール開催

市民とプロに分けてコンクールを開催。その作品募集を空港開港に向けて実施し、発表を空港施設で行なう。「空港でしか食べられない料理」開発やその産地と連携した企画など、地元食材を積極的に活用する。

〔課題〕

・関係機関、人材の積極的な交流や推進・支援等の組織整備

・地域ブランド化を目指す、総合的、継続的な地域支援

・旅行業者や広告関連業者との連携による提案型イメージ確立の戦略展開

・県民の意識改革～「茨城の良さ・らしさ」をPRし、おもてなしの心を持つ交流意識づけ

→人材育成とPR戦略が決め手となる

(2)　空港周辺地域活性化策の現状と課題

①　現状の取り組み

今回の事業推進にあたり、周辺地域での取り組みについてヒアリングや現地調査を実施した。

総体的な印象としては、共用飛行場として開発が進むものの、現在でも実際には自衛隊機が毎日のように離発着を繰り返しており、新たな地域資源＝茨城空港が２年後に開港すると言った、張り詰めたムードは感じ取れなかった。（確かに空港周辺の整備状況を見ても、地元としては、

「これからが、本当の仕事」といった感じで仕方がない様子でもある。）そんな中で、平成11年頃から始まった、小川町商工会青年部の皆さんによる「共用後のまちづくり」提言が目にとまった。これは、平成11年より青年部メンバーが共用後のまちづくりについて近隣青年の仲間と色々な立場、角度から研鑽を重ね、「百里シンポジウム」と称し、共用後のまちづくりに向けての研究結果とその過程を報告し、今後の地域活性化につなげるという大変意義深い事業である。

主な提言内容の概要は

㋑「アジアの整備街百里」構想

・自衛隊員の方々の定住や交流を目指し、整備学校や飛行学校を開設し、地域活性化につなげる

㋺「アスリートと老人が共存するまち」構想

・特別養護老人ホーム等とリハビリスポーツセンターの複合施設開設し、トレーナーとしての自衛隊退役者の雇用を考え、地域のスポーツ振興、健康づくりに寄与し、活性化を図る企画

㋩「有機農業と商品開発」構想

・アグリカルチャーショッピングセンターの開設

・有機農業専門学校開設、新技術による有機新商品の開発

・有機食品による学校給食の提供を通じて「地域ブランド」イメージを創出し、地産地消を促進し、

・観光客アピールする事で、地域活性化につなげるという生産―販売が一体の企画

㋥その他

・飛行体験のできるミュージアム施設

・百里バルーンクラブ設立　など

いづれも、雇用促進や地域の強みを活かした事業の提言であり地域活性化策として、大変示唆に富む内容である。何より地域の新たな担い手が活性化を真剣に考えた点が共感できる。

その他周辺地域としては、新たな特産品づくりを研究しているグループもある。現状までの取り組みを踏まえた上で、今後の開港に向けての実行に期待する状況と言える。

②地域活性化策と課題

まず前述の開発の基本となる「エアフロント構想」では、㋑観光・商業機能等の導入　㋺魅力ある地域づくりに向けた取組という２つの視点から、周辺地域の活性化を図る事が示されている。具体的には、㋑については特にターゲットを絞って段階的な形での取り組みの必要性を示し、㋺についてはまず「北関東の空の玄関口」としての役割を考慮し、交流や情報発信の拠点になる様

な活性化が重要と示している。

〔地域活性化具体策〕

(即可能なもの)

・旅行業者と連携による魅力ある商品提供

a）茨城空港に隣接したゴルフ場でのゴルフツアー

b）日帰りツアー　(例）いばらきの「食と自然を楽しむ」

(空港開港時までに検討するもの)

・併設される空港公園を利用した定期的なイベント開催

・無料駐車場利用客の空港施設利用促進と販売促進策

a）いばらき「食のテント村」等の定期的開催（ハード整備を伴う活性化)

・空港テクノパーク整備とそれに伴う企業誘致

・周辺道路整備に伴うサービス施策の展開（都市計画との整合性が必要)

・観光農園、農産物直売所～旅行業者との連携して、稼動力向上を図る

(将来的な展開)

・道路網の整備や空港利用客の増大による展開

a）複合型商業施設（広域型)

b）ホテル等宿泊施設、温泉施設（市場動向を見た上での展開となろう。その為にも、まず本報告書の趣旨でもある利用客100万人構想を実現させる事が、周辺地域活性化に向けては、重要となる)

c）空港へのアクセス鉄道～旧かしてつの活用（例）仙台空港アクセス鉄道と周辺開発（その他の活性化策)

・空港開港に向けては、そのハード整備に、地域事業者も参加させる事は言うに及ばないが、地域の素材、技術を活用した整備を実施し、その後の販促活動につなげる地域活性化策が必要である

〔課題〕

・今後の空港開港までの整備状況等更なる情報公開

我々のアンケート調査においても、県民の空港への意識は充分ではない。特に周辺地域には、「開港と活用」の両方の視点で意識向上と動機付けに向けて、情報公開を更に強めながら、準備にあたる事が必要と思われる。

・周辺地域のリーダー的人材育成とネットワークづくり

地域活性化にまたと無いチャンスである。前述の商工会青年部の様な地域の活発な動きが、数多く出て来る様な支援と、その動きを「まとめ、引っぱる」リーダーづくりが必要である。

・地域住民の貢献意欲の向上

迷惑施設ではなく、「わが街の掛け替えの無い、誇れる施設」として茨城空港が地元に迎えられる土壌が必要である。空港公園を利用した、お祭りや花いっぱい運動、更にはゴミのクリーン作戦など、地域住民が参画する貢献策を、押し付けでなく、行政と連携した形での「自発的動き」を支援する体制が、最終的に地域活性化につながると考えられる。

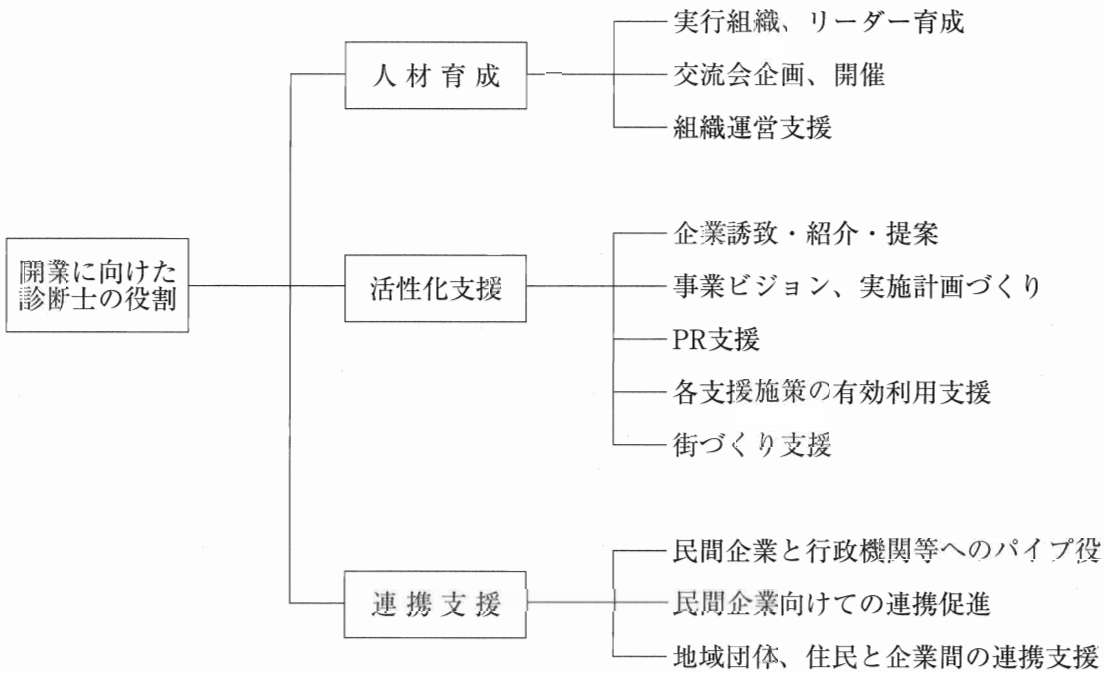
・一貫した都市計画の推進

周辺の行政機関が、空港周辺の計画的、中・長期的整備を実施する為に、目先の開港だけにとらわれず、今後の動向や環境保全、安全性を充分に考慮した上で、「都市づくり視点」での周辺活性化に取り組むべきである。

2　空港開港に向けた中小企業診断士の役割

この報告書をまとめるに当り、混迷する地域経済において、茨城空港開港は、活性化に向けた絶好のチャンスと捉え、地域経済活性化に対して貢献する立場にある、我々地域中小企業診断士の役割や研鑽のあり方を論じたい。

(1)　診断士の役割



診断士の役割としては、この巨大プロジェクトを成功させ真の地域活性化につながせる為に、大きく㋑人材育成　㋺活性化支援　㋩連携支援の３つの役割がある。この３つの役割は、プロジェクトの成功を収める為には、欠かせない要素であるが、活躍の主役たる行政関係機関、民間企業、住民等が、個別で完全に対応出来ない内容である。そこに，専門家である我々診断士のパイプ役としての役割が出てくるものである。地域活性化を論じる中で、その課題として上げてきた部分は、現地調査等現状を踏まえた上で、我々診断士のやるべき仕事が充分ではなかったと痛感した

ところもある。まずは、空港開港に向けて、「目に見える形」で、活性化のタネから始め、一つづつ支援へのつぼみを提案していく事からスタートさせるのが我々の役割だと認識したい。(その上でも、本報告書の意義は大きい)

また役割を果たす「使命感」も大切だと考えています。地域に住んでいる我々診断士は、地域から逃げる事は出来ず、したがって「地域への責任」を常に心掛けとして持ち、貢献しなければなりません。その点でも、今回のプロジェクトには常に関心を持ち、活性化を確かなものにする役割があると思います。

そして、地域の活性化には、通常時間がかかるケースが多いが、今回は、開港(22年3月)が決定している為、その上でも「計画的、大胆細心」のスピード運営が求められており、我々の診断士も充分にそのポイントを押さえた上で、役割を果たす事が重要であると思います。

(2) 研鑽のあり方

(1)の役割を踏まえた上で課別解決に向けて、以下の研鑽が重要と考えられる。

・施策の具体的展開の為の研鑽

「地域資源活用プログラム」、「物流効率化」、「商業活性化支援」等、マッチングする施策の提案とその責任ある展開

・連携した研鑽

巨大プロジェクトの為、一人の診断士というレベルの仕事ではない。我々が専門分野で結集して仕事や、提言等にあたる事も極めて重要である。

・地域の力を引き出す研鑽をする

押し付けの単発的な支援でなく、「長く効く漢方薬」的な支援を出来る研鑽が必要である。

・事業の主体や筋をはずさない研鑽を心掛ける

役割と効果を常に考えた支援や研鑽を行なう。

以上の様にまとめにあたり，我々の地域診断士の役割や研鑽について述べてみた。

これからが、本当の意味で、「地域活性化への道のりのスタートだ」と本調査研究をひとまず終えての現在の実感である。

(新たな地域資源 茨城空港) を一つの契機として、

地域診断士が地域に責任を持ち、自らが、その変革とチャンスに向けて、まず最初に動く事を誓って本報告書のまとめとしたい。